

逮捕に伴う搜索・差押え（無令状・220条）

ゼロから司法試験 復習ノート / ゼロから刑事訴訟法#13 / 動画: <https://youtu.be/i0sisuidnwU>

第2章 捜査 ⑧ / 動画の内容を見返し用にまとめたものです（動画には含みません）。

1. なぜ令状が要らないのか——憲法35条と220条〔短答・論文共通〕

原則として、住居の搜索・押収には令状が必要です（憲法35条）。もっとも、憲法35条1項は「第三十三条の場合を除いては」と定め、逮捕（33条）の場合を令状主義の例外として自ら認めています。

【条文】 憲法35条 ① 何人も、その住居、書類及び所持品について、侵入、搜索及び押収を受けることのない権利は、第三十三条の場合を除いては、正当な理由に基いて発せられ、且つ搜索する場所及び押収する物を明示する令状がなければ、侵されない。② 搜索又は押収は、権限を有する司法官憲が発する各別の令状により、これを行ふ。

条文 日本国憲法35条（住居等の不可侵）

① 何人も、その住居、書類及び所持品について、侵入、搜索及び押収を受けることのない権利は、**第三十三条の場合を除いては**、正当な理由に基いて発せられ、且つ搜索する場所及び押収する物を明示する令状がなければ、侵されない。② 搜索又は押収は、権限を有する司法官憲が発する各別の令状により、これを行ふ。

これを受けた刑訴法220条が、逮捕に伴う無令状の処分を定めます。

【条文】 刑事訴訟法220条 ① 検察官、検察事務官又は司法警察職員は、第百九十九条の規定により被疑者を逮捕する場合又は現行犯人を逮捕する場合において必要があるときは、左の処分をすることができる。

第二百十条の規定により被疑者を逮捕する場合において必要があるときも、同様である。一 人の住居又は人の看守する邸宅、建造物若しくは船舶内に入り被疑者の搜索をすること。二 逮捕の現場で差押、搜索又は検証をすること。③ 第一項の処分をするには、令状は、これを必要としない。

条文 刑事訴訟法220条（逮捕に伴う搜索・差押え）

① 検察官、検察事務官又は司法警察職員は、第百九十九条の規定により被疑者を逮捕する場合又は現行犯人を逮捕する場合において必要があるときは、左の処分をすることができる。第二百十条の規定により被疑者を逮捕する場合において必要があるときも、同様である。 一 人の住居又は人の看守する邸宅、建造物若しくは船舶内に入り被疑者の搜索をすること。 二 逮捕の現場で差押、搜索又は検証をすること。 ③ 第一項の処分をするには、令状は、これを必要としない。

199条の通常逮捕・現行犯逮捕・210条の緊急逮捕の、いずれの逮捕でも使えます。

2. 二大学説——緊急処分説と相当説 〔論文〕

無令状搜索が許される根拠の説明には、緊急処分説（学説）と相当説（判例・実務）の対立があり、ここが論文の出発点になります。

観点	緊急処分説（学説）	相当説（判例・実務）
根拠	逮捕現場で被疑者・共犯者に証拠を壊される緊急の必要性	逮捕現場には事件の証拠が存在する蓋然性が高く合理的
原則・例外	令状が原則・無令状は例外	令状搜索と優劣なし（原則・例外の関係でない）
緊急性	必要（恐れがなければ不可）	不要（証拠がありそうで足りる）
場所的範囲	身体+直接支配下に限定	同一管理権の及ぶ場所全体（+102②の状況）

無令状搜索の根拠——緊急処分説 vs 相当説（判例＝相当説）

観点	緊急処分説（学説）	相当説（判例・実務）
根拠	逮捕現場で被疑者・共犯者に証拠を壊される緊急の必要性	逮捕現場には事件の証拠が存在する蓋然性が高く合理的
原則・例外	令状が原則・無令状は例外	令状搜索と優劣なし（原則・例外の関係でない）
緊急性	必要（恐れがなければ不可）	不要（証拠がありそうで足りる）
場所的範囲	身体＋直接支配下（手が届く範囲）に限定	同一管理権の及ぶ場所全体（+102②の状況）

図：緊急処分説と相当説の対立点（根拠・原則例外・緊急性・場所的範囲）。

3. 時間的範囲——「逮捕する場合」 〔論文〕

時間の流れは、逮捕前→着手→完了→完了後の4段階で捉えます（着手＝拘束のための有形力の開始）。被疑者を捕まえる前に搜索を始める先行搜索の可否は、緊急処分説では不可、

相当説では時間的接着があれば若干の事前・事後も可（△）です。もっとも両説に共通するのは、逮捕への着手は必要だが逮捕の成功までは不要という点です。判例（最大判昭36・6・7／米子銀行強盗事件）も、「逮捕する場合」は時間的に幅をもち、搜索が逮捕に先行するか後行するかを問わない（ただし時間的接着を要する）としています。

判例

最大判 昭和36年6月7日（米子銀行強盗事件）。逮捕に伴う搜索・差押えのリーディングケース。「逮捕する場合」は単なる一時点ではなく**時間的に幅をもち**概念であり、搜索が逮捕に厳密に先行するか後行するかを問わない。もっとも逮捕との**時間的接着**を要する。

→ 先行搜索（被疑者の到着前に搜索を開始）も、逮捕と時間的に接着する限度で許される。

4. 逮捕に着手したが失敗（逃走）した場合〔論文〕

逮捕に着手したものの被疑者が逃走した場合は、いつ逃げたかで結論が分かります。

逃げたタイミング	緊急処分説	相当説（実務）
搜索を始めた後で逃走	○ 適法（開始時に被疑者がいて緊急性あり）	○ 適法（着手・時間的接着あり）
逃走した後で搜索	× 違法（被疑者不在で緊急性が消滅）	○ 適法となりうる（証拠は現場に残る）

逮捕に着手したが失敗（逃走）した場合の可否

逃げたタイミング	緊急処分説	相当説（実務）
搜索を始めた後で逃走 (搜索中に逃げられた)	○ 適法 開始時に被疑者がいて 証拠破壊の緊急性があった	○ 適法 着手があり時間的に 接着している
逃走した後で搜索 (いなくなってから探す)	× 違法 被疑者がいない以上 緊急性はもうない	○ 適法となりうる 証拠は現場に残るから 探す合理性がある

図：逃走タイミング別の適否（緊急処分説／相当説）。

5. 場所的範囲——「逮捕の現場」〔論文〕

場所的範囲は説によって広狭が分かります。緊急処分説では、被疑者の身体と直接支配下（手が届く＝証拠を壊せる範囲）に限られます。相当説では、同一管理権の及ぶ場所全体に及び、家の中で逮捕したなら家全体が対象です。ただし相当説でも無制限ではなく、102

条2項の状況（押収すべき物の存在の見込み）が必要です。なお緊急処分説でも、被疑者が暴れて移動しそうな範囲は例外的に認められます。

【条文】 刑事訴訟法102条2項 被告人以外の者の身体、物又は住居その他の場所については、押収すべき物の存在を認めるに足りる状況のある場合に限り、搜索をすることができる。

条文 刑事訴訟法102条2項（搜索の制限）

被告人以外の者の身体、物又は住居その他の場所については、**押収すべき物の存在を認めるに足りる状況のある場合に限り**、**搜索をすることができる。**

6. 物的範囲——両説とも結論一致

〔短答・論文共通〕

差し押さえられる物の範囲は、両説とも結論が一致します。許されるのは、①逮捕の被疑事実に関する物と、②凶器（逮捕の安全確保のため）です。逆に、逮捕事実と全く無関係な別件証拠は許されません。理由づけだけが説で異なり、緊急処分説は「壊される物・妨げになる物」、相当説は「存在の蓋然性が高い物」と説明します。

📝 論文の型 | 逮捕に伴う無令状搜索の根拠と範囲

- 【コア規範】（逐語暗記＝太字キーワード）
憲法35条1項は令状主義の例外として33条（逮捕）の場合を認め、220条1項2号は**逮捕の現場**での無令状の搜索・差押えを許容する。その趣旨は、逮捕の現場には被疑事実に関する**証拠が存在する蓋然性が高く**収集が合理的である点にある（相当説）。無令状で許される範囲は、**物的には被疑事実に関連する物（及び凶器）、場所的には逮捕に着手した場所の管理権が及ぶ範囲**に限られる。

- 【復元キー】①根拠＝憲35Iが令状主義の例外として逮捕の場合を認める→220I2号→②趣旨＝逮捕現場は証拠存在の蓋然性が高い（相当説）→③範囲（物）＝被疑事実関連物＋凶器／（場所）＝逮捕着手場所の管理権内→④対立＝緊急処分説なら根拠は証拠破壊防止の緊急性・範囲は身体と直接支配下に限定。
- 【フル論証】憲法35条1項は、令状主義の例外として33条（逮捕）の場合を認め、これを受けて刑訴法220条1項2号は逮捕の現場での無令状の搜索・差押えを許容する。その趣旨は、逮捕の現場には被疑事実に関する証拠が存在する蓋然性が高く、これを収集することが合理的である点にある（相当説）。もっとも令状主義の趣旨に照らし、無令状で許される範囲は、物的には被疑事実に関連する物（及び凶器）に、場所的には逮捕に着手した場所の管理権が及ぶ範囲に限られる。（※緊急処分説に立つ場合は、根拠を証拠破壊防止の緊急性に求め、範囲を被疑者の身体・直接支配下に限定する。）

★ コア規範（逐語で覚えるのはここだけ） | 逮捕に伴う無令状搜索の根拠と範囲

憲法35条1項は令状主義の例外として33条（逮捕）の場合を認め、220条1項2号は逮捕の現場での無令状の搜索・差押えを許容する。その趣旨は、逮捕の現場には被疑事実に関する証拠が存在する蓋然性が高く、収集が合理的である点にある（相当説）。令状主義の趣旨に照らし、無令状で許される範囲は、物的には被疑事実に関連する物（及び凶器）、場所的には逮捕に着手した場所の管理権が及ぶ範囲に限られる。

憲35①・刑訴220①2号（相当説／緊急処分説の対立）

復元キー（理解した趣旨から答案を再構成する）

- 1 根拠＝憲35が令状主義の例外として逮捕（憲33）の場合を認める → 220①2号
- 2 趣旨＝逮捕現場は被疑事実の証拠存在の蓋然性が高いから無令状でも合理的（相当説）
- 3 範囲（物）＝被疑事実に関連する物＋凶器／（場所）＝逮捕着手場所の管理権が及ぶ範囲
- 4 対立＝緊急処分説なら根拠は証拠破壊防止の緊急性・範囲は被疑者の身体と直接支配下に限定

- 【事例】 捜査官が覚醒剤所持の被疑者を自宅リビングで逮捕し、令状なしで同じ家の奥の一室を搜索した。
- 【問題提起】 令状なしの奥の部屋の搜索は、220条1項2号の「逮捕の現場」での搜索として適法か。

- 【あてはめ】 奥の部屋は逮捕した自宅と同一の管理権が及ぶ場所であり、覚醒剤所持という被疑事実に関する証拠の存在の蓋然性も高い。搜索対象も被疑事実に関連する物に限られる。よって「逮捕の現場」での搜索として適法。

答案の型（司法試験で使う型） | 逮捕に伴う無令状搜索の根拠と範囲

【事例】 捜査官は覚醒剤所持の被疑者を自宅リビングで逮捕し、令状なしで同じ家の奥の一室を搜索した。

【問題提起】 令状なしで行った奥の部屋の搜索は、220条1項2号の「逮捕の現場」での搜索として適法か。

【規範】 上記の規範を定立（相当説＝証拠存在の蓋然性／場所＝同一管理権・物＝被疑事実関連物＋凶器）。

【あてはめ】 奥の部屋は被疑者を逮捕した自宅と同一の管理権が及ぶ場所であり、覚醒剤所持という被疑事実に関する証拠が存在する蓋然性も高い。搜索対象も被疑事実に関連する物に限られている。よって「逮捕の現場」での搜索として適法である。

7. 別件の証拠を見つけたら——3つの処理〔短答〕

搜索中に別件の証拠を見つけたときの処理は3つあります。第一に、任意提出を受けて領置

する方法です（同意に基づく任意捜査で令状不要）。

【条文】 刑事訴訟法221条 検察官、検察事務官又は司法警察職員は、被疑者その他の

者が遺留した物又は所有者、所持者若しくは保管者が任意に提出した物は、これを領置することができる。

条文 刑事訴訟法221条（領置）

検察官、検察事務官又は司法警察職員は、被疑者その他の者が遺留した物又は所有者、所持者若しくは保管者が任意に提出した物は、これを領置することができる。

第二に、新たに搜索差押許可状を取得して（218条1項）差し押さえる方法です。第三に、その物が別罪の証拠であれば、別罪で現行犯逮捕・緊急逮捕し（212条等）、新たな220条による無令状差押えを行う方法です。

8. 移動先での身体搜索——同視説 〔論文〕


その場での搜索が、被疑者の名誉・抵抗による危険・交通の妨げ等から相当でない場合が

あります。判例（最決平8・1・29 刑集50巻1号1頁／和光大学事件）は、こうした場合に最寄りの適切な場所へ速やかに連行して行う搜索も「逮捕の現場における搜索と同視」できるとしました。縛りは、どこへ連れて行ってもよいわけではなく、最寄りの適切な場所へ速やかに、という点にあります。

判例

最決 平成8年1月29日（刑集50巻1号1頁・和光大学事件）。被逮捕者をその場で捜索することが、被疑者の名誉・抵抗による危険・交通の妨げ等の事情から相当でない場合に、速やかに最寄りの適切な場所まで連行して行う捜索も、刑訴220条1項2号の「逮捕の現場における捜索と同視」できる。

→ どこへ連れて行ってもよいのではなく、最寄りの適切な場所へ速やかに、が要件。

 論文の型 | 移動先での捜索（逮捕の現場との同視）

- 【コア規範】（逐語暗記＝太字キーワード）
220条1項2号の「逮捕の現場」での捜索には、被逮捕者をその場で捜索することが被疑者の名誉、抵抗による危険、交通の妨げ等の事情から相当でない場合に、速やかに最寄りの適切な場所まで連行して行う捜索も、これと同視できる範囲で含まれる〔最決平8・1・29〕。
- 【復元キー】①問題＝現場を離れ時間も経過した捜索が「逮捕の現場」での捜索とい

えるか → ②その場での捜索が相当でない事情＝被疑者の名誉・抵抗の危険・交通の妨げ等 → ③最寄りの適切な場所へ速やかに連行して行う捜索も逮捕の現場と同視 → ④同視できる範囲にとどまる（無限定に拡大しない）。

- 【フル論証】刑訴法220条1項2号の「逮捕の現場」での捜索には、被逮捕者をその場で捜索することが、被疑者の名誉、抵抗による危険、交通の妨げ等の事情から相当でない場合に、速やかに最寄りの適切な場所まで連行して行う捜索も、これと同視できる範囲で含まれる（最決平8・1・29）。

★ コア規範（逐語で覚えるのはここだけ） | 移動先での搜索（逮捕の現場との同視）

刑訴法220条1項2号の「逮捕の現場」での搜索には、被逮捕者をその場で搜索することが、被疑者の名誉、抵抗による危険、交通の妨げ等の事情から相当でない場合に、速やかに最寄りの適切な場所まで連行して行う搜索も、これと同視できる範囲に含まれる（最決平8・1・29）。

最決平8・1・29

復元キー（理解した趣旨から答案を再構成する）

- 1 問題＝現場を離れ時間も経過した搜索が「逮捕の現場」での搜索といえるか
- 2 その場で搜索が相当でない事情＝被疑者の名誉・抵抗による危険・交通の妨げ等
- 3 → 最寄りの適切な場所へ速やかに連行して行う搜索も逮捕の現場と同視
- 4 同視できる範囲にとどまることが必要（無限定に拡大しない）

- 【事例】路上で現行犯逮捕した被疑者を、衆人環視・交通の妨げを避けるため近くの警察署へ連行し、逮捕の約1時間後に身体を搜索した。
- 【問題提起】現場を離れ時間も経過した搜索は、220①二の「逮捕の現場」での搜索

といえるか。

- 【あてはめ】路上での身体搜索は被疑者の名誉を害し交通の妨げにもなり相当でない。最寄りの警察署へ速やかに連行して搜索した以上、逮捕の現場における搜索と同視でき、適法。

答案の型（司法試験で使う型） | 移動先での搜索（逮捕の現場との同視）

【事例】

捜査官は路上で被疑者を現行犯逮捕したが、衆人環視で交通の妨げにもなるため、近くの警察署へ連行し、逮捕の約1時間後に身体を搜索した。

【問題提起】

現場を離れ時間も経過した搜索は、220条1項2号の「逮捕の現場」での搜索といえるか。

【規範】

上記の規範を定立（現場での搜索が相当でない事情＋最寄りの適切な場所へ速やかに）。

【あてはめ】

路上での身体搜索は被疑者の名誉を害し交通の妨げにもなり相当でない。そこで最寄りの警察署へ速やかに連行して搜索した以上、逮捕の現場における搜索と同視でき、適法である。

9. 第三者の身体搜索〔短答〕

現場に居合わせた第三者の身体も対象になりますが、無条件ではありません。102条2

項の準用により、押収すべき物の存在を認めるに足りる状況（今ポケットに何か隠した、といった具体的な疑い）が必要です。緊急処分説なら直接支配下＋証拠隠滅のおそれ、相

当説なら同一管理権内＋同状況が要り、単に居合わせただけでは違法です。

短答ひっかけ

- 逮捕に伴う無令状捜索＝着手は必要・逮捕の成功は不要（逃げられても可の場合あり）。
- 物的範囲は両説一致＝被疑事実関連物＋凶器（緊急処分説/相当説で差なし）。
- 先行捜索＝緊急処分説×／相当説△。場所＝緊急〔身体・直接支配下〕／相当〔同一管理権〕。
- 第三者の身体＝居合わせただけでは×。102②の状況が必要。

論文の型

- 本文中の2ブロック参照。「逮捕に伴う無令状捜索の根拠と範囲」「移動先での捜索（逮捕の現場との同視）」を逐語で押さえる。

今日の地図（保存版）

- 根拠＝憲35①が「33条の場合を除いて」逮捕を令状主義の例外とする→220①で無令状の捜索・差押え（199通常逮捕・現行犯・210緊急逮捕いずれも可）。
- 二大学説＝緊急処分説（証拠破壊防止の緊急性／場所＝身体・直接支配下）／相当説＝判例・実務（証拠存在の蓋然性が高い／場所＝同一管理権＋102②）。
- 時間＝「逮捕する場合」は幅をもち着手は必要・成功は不要（米子銀行強盗・最大判昭36・6・7）。先行捜索は緊急×／相当△。
- 物的範囲＝被疑事実関連物＋凶器（両説一致）。無関係な別件証拠は不可。
- 移動先＝その場が相当でなければ最寄りの適切な場所へ速やかに連行して捜索も同視（和光大学・最決平8・1・29）。第三者の身体は102②の状況が必要。

次回は第2章⑨「取調べと黙秘権」。取調べの根拠（198条）、取調べ受忍義務の有無、黙秘権・自己負罪拒否特権を扱います。